

「この戦争さえなかつたら、愛する国のために死ぬより、わしは、愛する人のために生きたい！」これは、あるドラマの中で出てきたセリフだ。この言葉を聞いたとき、私は、愛する人のために「死にたい」と言うのではなく、愛する人のために「生きたい」と言うところが強く印象に残つた。

このドラマは、戦争の時代に生きていた人物の実話をもとにした話である。最初は何気ない日常が描かれていた。しかし、戦争が始まると男の子が兵隊になるために訓練をしていたり、男性は戦地に連れて行かれ戦つたり、戦地に行かない人達は貧しい暮らしをする様子が描かれるようになり、私はとても驚いた。小学生が勉強ではなく戦う訓練をするなんて思いもしなかつたからだ。さらに戦地に行つた人々は豆ほどの大きさの乾パンしか食べられないのにお国のために戦わなければならぬし、人はどんどん亡くなつてしまふ。残酷すぎる世の中に、私は悲しくなつた。戦地に行くことになつた男性は、好きな女性に、「生きて帰つてこられたら結婚してください」と伝え、二人はとても嬉しそうだつたのに、戦地に行つた男性は亡くなつてしまつた。戦争がなかつたら二人はずつと幸せに暮らせるはずだつたのに……。そのうえ戦争で亡くなつてしまつた人達に、周りの大人们は口をそろえて「立派だった」と言つていた。私は何が立派なのだろうと思つた。戦争で苦しんで死んでしまつた人達をどうして立派と言えるのか。なぜ争うことが正義なのか。戦争なんてみんな嫌なのに、なぜ国と国で争うのだろうか。なぜ仲良くできず土地の取り合いなんかするのだろうか。なぜ人間の力を命を奪うために使うのだろうか。私には、そういった考えが全く分からなかつた。しかし、あるニュースを見たことによつて、みんながみんなそうでないことを知つた。それは、大阪・関西万博に訪れた人々が電車が動かなくて帰れない、というニュース。お客様は万博の会場で電車が動くのを待つことになつた。多くの人がいる中、暑くて体調を崩してしまつるや、警察や駅員とケンカをする人がいた。しかし、その時ドイツ館やオランダ館の人達がお菓子や水を配布したり、電力館の人達は、スマホの充電コードを貸してしたり、ポルトガル館の人達はダンスを披露したりしていたのだ。日本人だけでなく、世界のいろいろな国の人々が協力してお客様の支えになつてゐる様子を見て、私は、世界中の国々がみんな争つてゐるわけではなく、「誰かを助けたい」と思い行動してゐる人々

がいるということを知った。

私は、あのドラマで見たような悲しいことが起ころる戦争がなくなつてほしいと思う。そのためには、人と人との関係が良くないといけないとと思う。お互いがお互いの個性を認め合い、譲り合うことで平和な世界が生まれると思う。私が二年生に進級した時、担任の先生が言つていた。「私はクラスのみんなが仲良くなりなさいとは言わない。誰にだつて苦手な人はいるし、無理に仲良くなつても辛いだけ。でも人には人の個性があるから個性は否定せず大切にすること。」でも自分の生活を振り返つてみた時に、苦手な人へ冷たい態度をとつてしまふ自分がいた。個性を認めるのはとても難しい。人のマイナスなどろに目を向けてしまう。気が合わないと思う時もある。しかし、誰にだつて良いところは必ずある。だから私は、苦手な人でも個性を認めて受け入れられるようになりたい。人の良いところをたくさん見つけたい。一人の力では変わらないかもしれない。それでも、自分が行動すれば周りの人も変わるかもしれない。誰かが変わることを待つより、自分が変わればいい。そうしていつかは、争いのない世界、お互いを認め、個性を大切にできる平和な世界にしたい。